

アルケイアー記録・情報・歴史
第四号 二〇一〇年三月 五七―七五頁
南山大学史料室

南山大学史料室のプレゼンス

河合陽子

The presence of Nanzan University Archives

KAWAI Yoko

archeia: documents, information and history

No.4 March, 2010 pp.57-75

Nanzan University Archives

南山大学史料室のプレゼンス

河合陽子

はじめに

二〇〇五年四月一日、南山大学史料室（以下、大学史料室とする）は、総務課の管轄の下に設置された。スタッフは、大学史料室長（総務担当副学長）一名、大学史料室担当教育職員一名、大学史料室担当事務職員一名から構成され、二〇〇六年二月に臨時職員一名が配置され、現在に至っている。大学史料室運営委員会の委員構成は、各学部より一名選出された教育職員と、名古屋キャンパス総務課長、瀬戸キャンパス第一課長となっている。運営委員会は、年に二回行なわれており、五月前後と一月前後に開催されている。

二〇〇五年一二月に教育職員・事務部署を対象に、大学史料室への文書記録の移管・寄贈についての説明会を開催し、移管・寄贈の方法を明示した。これによって、資料の散逸防止を確認し、教育職員・事務部署からの本格的な移管・寄贈が始まった。

二〇〇七年三月に、大学史料室紀要『アルケイアー記録・情報・歴史』を創刊した。アルケイアとは、アーカ

イブズの語源のギリシヤ語から採られていて、副題は、記録を収集・整理・保管したうえで、情報として発信し、分析して歴史を解明することから付けられている。「南山大学」の名称を冠していないのは、本紀要が大学史料室における成果の好評の場にとどまることなく、広く社会に開かれた存在になることを目指しているからである。¹⁾

今までの活動として、南山大学司書課程・学校図書館司書教諭課程委員会との共催で、二〇〇五年に一回、二〇〇七年に二回、外部から講師を招いて、講演会とシンポジウムを開催した。

事業としては、南山学園史料室（以下、学園史料室とする）との連携で編纂作業を行なっている。二〇〇七年に『HOMINIS DIGNITATI 一九三二―二〇〇七 南山学園創立75周年記念誌』を刊行した。また『南山学園史料集』（二〇〇五年～）、『南山アーカイブズニュース』（二〇〇八年～）の編纂は、南山学園創立75周年記念誌編纂を継承するもので、前者はとくに、学園史料室と大学史料室の所蔵史料をもとに作業が進められている。今回は、大学史料室の所蔵史料と、学園史料室との連携について、述べたいと思う。

一 大学史料室の所蔵史料

（一）大学史料室は何を保管する施設か

大学史料室が取り扱う史料について、「南山大学史料室規程」には次のように定められている。

第2条 前条第3項の目的を達成するため、史料室は、次の各号に掲げる史料を取り扱う。

1 南山大学文書保存規程により保存された文書のうち、保存年限を過ぎたもの

2 南山大学文書保存規程により永久保存された文書のうち、文書保管部署が史料室への移管を適当と認め
たもの

3 本学および高等教育に関する史資料

4 その他必要と認められる史資料

1と2でいう南山大学文書保存規程に定められている文書とは、南山大学の運営に関わる文書の事で、学内の業務文書をいう。

3は、1と2以外の南山大学に関係する史資料と、高等教育に関係する史資料をいう。南山大学に関係する史資料では、授業や研究に関する資料、学生に関わる資料など、さまざまである。また、南山大学周辺の写真・地図などの地域史資料も収蔵しており、南山大学の背景を知る上での手がかりとなっている。もう一つの高等教育に関する史資料では、主に、他大学の年史／ニュース、文部省や大学基準協会などの諸団体関係を収蔵している。これは、他大学を知り、南山大学の個性を理解する手助けとなるだけでなく、南山大学の歴史を高等教育史の中で理解するための手がかりとなる。

1～3の業務文書や教育研究資料は、作成された目的や役割を終えた後、大学史料室に移管・寄贈されることにより、新たな役割が与えられる。新たな役割とは、大学史料室の目的である「本学に関する史資料の収集、整理、保管、公開などを行ない、教育・研究に資すること」という役割、つまり大学アーカイブズの役割を持つ。

4は、実例として、南山大学の旧教育職員が中心に活動した研究会の東亜考古学文庫や、南山大学（現名古屋キャンパス）を設計した Antonin Raymond に関する刊行物、絵画や彫刻を南山学園に寄贈したドイツの彫刻家 Yrsa

von Leisner に関する書籍などを収蔵している。

このように、南山大学史料室の収蔵史料は、学内業務文書と教育研究関係史料の占める割合が多い。

(二) 学内業務文書を積極的に収集している理由

恒常的な業務として、大学運営に関する業務文書が事務部署から移管され、整理・保管を行ない、公開している。このような業務文書を取り扱うこととなった経緯は、大学史料室が設置された事情と深く関わっている。このことについて書かれた文書を次に載せる。

南山大学文書規程に基づいて行なわれてきた現用期間を過ぎた業務文書の措置について、一昨年来の南山学園75周年記念誌編纂事業の一環として行われた学園全部署の文書所在確認調査の結果、統一的基準に拠らずに処分がなされ、貴重な学園ならびに大学史料が次々に廃棄されていることが判明した。こうした文書の散逸を防ぐため、法人事務局から学園内各単位校等に対して、文書保存と廃棄文書の学園史料室への移管が要請されたことから、一部は実行され始めているものの、残念なことにこの二年間に廃棄されてしまった文書も多い。また永久保存文書の紛失なども記憶に新しい。こうしたことから見て、史料保管体制の確立が急務なことは明らかである。

このように学内業務文書の保管の在り方が問題視・議論され、文書管理の在り方が見直された結果、大学史料室が設置され、学内の業務文書を取り扱うこととなった。

(三) 教育研究関係の史資料を積極的に収集している理由

このことについて書かれた文書があるので引用説明とし、その効果について実例をあげて紹介する。

教育職員から提供された史料は、南山大学における教育・研究を具体的に知る手がかりとして有効であるばかりでなく、大学史編纂の成果が近現代日本の学術史再構成で重要な役割を果たしている今日、その意義は、南山大学史にとどまるものではない。すべての専門分野が存在意義を自明としていられず、さらには大学そのものの存在意義も再検証にさらされる現状で、あらためて個々の足跡をたどり、いかなる歴史と現状の上に存立しているかを再認識することが求められているのであり、大学の史料が果たす役割が注目される。⁽³⁾

実例① 京都大学でフランス語を教え、その後、南山大学に移ったカルドン・ド・モンチニーの書簡や写真等の史料について。伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出——」⁽⁴⁾に書かれている「hoc（二輪の無蓋軽馬車）」の写真について、現在南山大学に保管してあると『南山大学 BULLETIN』第二九号⁽⁵⁾に掲載されていた。「ド・モンチニー先生の書簡・写真等」とマジックで書いてある段ボール一箱を整理すると、その写真と、フランス・ジョッキークラブからの書簡が見つかった。モンチニー氏はジョッキークラブの名誉会員とも伊吹武彦「あの時あの頃——モンチニー講師の思い出——」に書かれていた。

実例② 人類学博物館の職員より、名誉教授が大学史料室に寄贈した史資料を見たいとの問合せがあった。名誉教授「退職の際、大学史料室に寄贈したので、大学史料室に問合せください」との旨をその職員に言い、閲覧の承諾は得ていた。大学史料室としても、退職時に寄贈者本人から公開可との申し出を受けていたため、閲覧に供

した。人類学博物館の職員からは、大学史料室にあることで、閲覧までの時間が短縮されたと言っていた。

実例③ 長い間勤めた教育職員が退職した際に、就任した頃から揃えていたという『学生便覧』『大学案内』『南山大学 BULLETIN』の寄贈があった。これによって、南山大学を知る際にまず参照する史資料を揃えることができた。長い間勤めた教育職員が退職する際は、入手困難な史資料の寄贈が期待できる。

(四) 業務文書、教育職員保管文書の移管・寄贈について

① どのように始まったのか

開室年に「大学史料室への文書記録移管に関する説明会」を教育職員・事務部署に向けて行なった(二〇〇五年二月五日)。そして、「南山大学に關係する史資料なら、どのようなものでも、何部でも受入れるので、廃棄予定のものは捨てず、大学史料室へ移管してほしい」との内容の説明を行なった。無謀とも思われるこの呼びかけは、提供する側の選別を避けることを第一に考慮したためで、受け入れ側も覚悟しなければならなかった。具体的な周知方法は、教育職員へは、各学部の教授会で、大学史料室運営委員会委員より話をしてもらった。大学史料室運営委員会の委員構成は、各学部から一名ずつ選出されているため、各教授会への周知が可能であった。事務部署への周知は、事務部署から職員一、二名に出席してもらい、説明会の情報を事務部署へ持ち帰って周知してもらった。教育職員・全事務部署に周知した上で、退職・異動時に文書「史資料移管・寄贈のお願い」を対象者に送った。その結果、業務文書、教育職員保管文書の移管が始まったのである。退職・異動時の文書配付は現在も続けられている。

② 実績

移管・寄贈が起動し始めて五年目の現在、その件数実績を年度別に表すと、表1のようになる。

表1 大学史料室への移管・寄贈の件数実績

年 度	教 員		事務職員		事務部署		他		合 計	
	人 数	件 数	人 数	件 数	部署数	件 数	人 数	件 数	人・部署数	件 数
2005	1	1	0	0	5	8*1	0	0	6	9
2006	5	11	4	4	8	28	0	0	17	35
2007	5	7	5	5	8	23	0	0	18	35
2008*2	14	21	0	0	14	48	1	1	29	70
2009*3	6	10	3	5	7	32	2	2	18	49

- *1 「大学史料室への文書記録移管に関する説明会」後にあった。
- *2 6月30日倉庫が設置される。退職者が多数あった。
- *3 5月15日重複史料を初めて廃棄する。12月24日現在の実績数である。

移管一件あたりの資料の量は、さまざまで、ファイル一冊の場合もあれば、ダンボール三六箱分の場合もあった。毎年の傾向として、年末から年度始めに件数が集中することが多い。退職・異動時に「史資料移管・寄贈のお願い」文書を対象者に送ることで、寄贈数が増える。教育職員・事務職員からの寄贈数は、退職者からの数を除くと、年一回定期的に寄贈のある教育職員一名のほか、四〜五名/年程度である。事務部署からの移管数は、年度末に限らずあるが、全事務部署から移管があるわけではない。

③ 学内の周知度はどの程度か

大学史料室の存在さえ知られていない場合もあるが、文書管理が整備され、定期的に移管のある事務部署もある。その一例として情報システム課は、部署内の所蔵する文書を一覧表に作成した上で、積極的・定期的な移管がある。文書一覧は、タイトルが「財産保存基準」となっており、文書の性格、初期保存方法、最終保存方法、大学史料室への移管実績などが記されている。学内文書管理の全体を考えると、極めて示唆的である。

二〇一〇年三月、南山大学史料室 Web ページの公開を機に、大学史料室の存在を知る人は多くなるであろう。大学内には、教育職員・事務職員で情報を共有する Web ページ（情報提供システム）がある。全職員がこの Web ページを一日一回は開く習慣となっている。そこに、南山大学史料室 Web ページ公開の情報をのせた

ので、学内での周知度は高くなるであろう。存在を知ってもらうことをひとつの目標としていた大学史料室としては、完全周知となったわけではないが、大きな一歩である。

(五) 史資料の評価・選別について

大学史料室への文書記録移管に関する説明会から一年経つと、配架棚はいっぱいになり、収蔵場所・整理が追いつかず、未整理史資料であふれた。「南山大学に関係する史資料なら、どのようなものでも、何部でも受入れるので、廃棄予定のものは捨てず、大学史料室へ移管してほしい」と宣言した結果である。未整理史資料があふれてから約二年後、困り果てていたところに、大学史料室の倉庫が設置されることとなった(二〇〇八年六月三〇日)。これで、プラス約一七%の収蔵容量が確保され、少しは改善された。しかし、依然として、未整理史資料を整理し配架する場所がない。どうしたものか……配架棚を見ると、重複史資料が目に残った。今までは重複史資料も保存していたが、収蔵場所確保のため、重複分を捨てざるを得なくなった。開室してから四年後、初めて史資料を捨てた(二〇〇九年五月一五日)。捨てたと言っても、重複史資料なので、受け入れた史資料の情報がなくなることはない。廃棄する重複史資料は、中身を確認し、書き込み等がなければ廃棄する。書き込みがあるものは、一史資料として保管対象としている。この重複史資料は「大学史料室の資料価値判定基準(史資料収集保管基準)(案)」に定義されている。現在、大学史料室運営委員会で審議されている。廃棄した史資料は、廃棄記録をエクセルで作成し、紙媒体でファイルしている。

収蔵史資料には、利用頻度の高いもの、低いもの、または現時点で利用のない史資料もあるが、将来利用されないわけではない。収蔵場所の確保の問題は現実にあるが、移管・寄贈が全事務部署・全教育職員からでなく少数で

あること、学外からの寄贈も少ないこと、現時点で重複を廃棄すれば収蔵スペースが確保できること、現在より広い場所への移転の可能性がないわけではないことをもとに、重複か否かを選別し廃棄する方法としている。

収蔵史資料に関する大学史料室の特徴は、以下のようにまとめられる。

- ① 『南山大学の運営に関する業務文書』と『教育研究関係の史資料』が所蔵史資料の多くを占め、またそれらを積極的に収集している。
- ② 教育職員が個人で管理していた業務文書（教育・研究を含む）を積極的に受け入れており、実例として効果があった。
- ③ 現時点では、重複史資料か否かで評価・選別を行なっている。

（六）業務文書、教育職員保管文書の移管・寄贈を行なった結果

史資料面での結果は、以下の三点にまとめられる。

- ① 「会議記録」などの継続性のある史資料をあらゆる所から集めて、ひとつに揃えてきた。
実例として、「委員会記録」を作成所管部署で保存するため、大学史料室への移管は見込めなかった。だが、教育職員・事務職員に「廃棄予定のものは移管・寄贈してください」と移管・寄贈を促したことにより、その委員会の委員から移管があった。
- ② 「南山大学に関する史資料は、どのようなものでも受け入れる」と呼びかけ、移管・寄贈の割合を上げた。
受け入れ側も覚悟のうえ、このような呼びかけをし、重複することが明らかなものもいったん受入れた。その

上で、重複か否かを調べている。手間がかかるが、提供する側の選別を避けることが狙いである。この狙い通り、移管・寄贈へのハードルを低く感じている事務部署・教育職員は少なからずある。その反面、「大学史料室に送るということは、大学として残した方が良い重要な（もしくは貴重な）資料」という印象が多少あり、南山大学に関係する資料は何でも大学史料室に送るという認識は薄いかもしれない」という意見もあり、移管ハードルの認識に温度差があるようだ。そのため、人事異動対象者に、その都度、大学史料室への資料提供のアナウンス文書が配付されるのは非常に効果的であるとの声もあった。

- ③ 二〇〇八年六月三〇日に倉庫が設置されていなかったら、収蔵スペースが不足し、史資料であふれていたかもしれない。

利用面での結果は、以下のようにまとめられる。

収蔵史資料の利用実績／レファレンスの利用は年々増えているという感触がある。実際にはどれくらい増えているのだろうか。今までの問合せ回数を年度別に表2に表した。

- ④ 研究上の利用だけでなく、業務上の利用が増えている。

全体的に利用回数は増えているが、特に事務部署による（業務上の）利用が顕著である。最近の問合せでは、定員数、式典の開始年月、上南戦五〇周年記念事業の特集号作成のための問合せがあった。「もしもわかれば……」といって来室する職員や電話での問合せが増え、大学史料室で調べればわかるかもしれないと思う人が現れてきている。

- ⑤ 個人情報保護に関して。

これまでのところ、それに抵触するような実例はない。しかし「個人情報の保護に関する法律」と「南山大学

表2 大学史料室への問合せ回数

年 度	利用回数	内 訳					
		教育職員	学 院 生 生	事務部署	他大学	同窓会 卒業生	ほ か
2005	7	2	3	0	0	2	0
2006	13	3	6	2	1	0	1
2007	14	6	1	5	1	0	1
2008	34	6	7	10	4	5	2
2009*1	27	5	3	10	2	0	7

*1 2010.1.7現在

個人情報に関するガイドライン」に則し、写真などの利用で控えてもらわざるを得なかった事例は何度かあった。(「南山大学個人情報に関するガイドライン」は南山大学の公式 Web ページに公開されている。)

(七) 結果からみた疑問

移管・寄贈の開始後はその数が増えたが、最近ひと段落したように思える。なぜだろうか。考えられる理由は、以下の三点である。

- ① 大学案内や広報誌、学生便覧などのまず参照する史資料が、ほぼそろってきた。
- ② 学園史料室に保管されていた大学設立当初の大学関係史資料を、二〇〇九年の夏から秋にかけて大学史料室に移管した。これにより、大学設立当初のことは学園史料室でないと分からないという事態が減った。現在は、大学史料室で分からなければ、大学はもとより学園内でわかるところはない。
- ③ 事務部署の保存資料も整理されたか？

整理の仕方は変わっていないが、移管したことによって、スペースに余裕ができた。特に変わりはない。との声を聞いている。

二 学園史料室と大学史料室

多くの私立大学では、創設者（団体）等の顕彰や建学の理念を歴史的に確認するため、史料室を設置している。⁽⁶⁾ 南山学園では、そのような機能は、主に学園史料室が担ってきた。南山学園には、学園史料室と大学史料室の二つの史料室が存在する。学園史料室について簡単に紹介する。⁽⁷⁾

(一) 学園史料室の設立

南山学園創立六〇周年記念誌『南山学園と六十年の歩みをともしして』（一九九二年）の編纂を機に、南山中学高校友の会によって、史資料の収集がなされた。収集作業が進むに連れて、学園の歴史資料の重要性が認識され、一九九三年、南山国際高等学校・中学校が豊田へ移転したその跡の一角に学園史料室・友の会分室として、スペースを確保した。そして、七月九日に南山中学高校友の会会長と南山学園理事が会談し、学園史料室の設置が正式に決定された。八月二四日付けで南山学園史料室規程が施行されている。

一九九九年、南山大学創立五〇周年の記念誌編纂のために、学園史料室所蔵の史資料を有効活用できるようなことので、史料展示室の開設の提案が、理事長から南山中学高校友の会会長に文書で当てられた（一九九六年一月二五日付）。学園名誉職員と南山中学高校友の会とによって、史資料の整理、分類がなされ、一九九九年一〇月に学園史料展示室（二室）を開設した。利用は、自校史教育のため南山中学高校生の利用者、卒業生などの利用者もいたが、二〇〇四年八月の耐震工事を機に、学園史料展示室は据え置かれた。

(二) 学園史料室の所蔵史料

学園の初期から一九七五年頃までは、二人の職員の有志的働きにより、史料の収集と整理、また大量のメモ（通称、松風メモ）が残されている。これが学園史料の礎となっている。ほかには、神言修道会とのやり取り文書『南山高等・中学校四十年史』編纂後に移管された史料、旧名古屋聖霊学園関係、私立大学連盟関係など、さまざまである。また南山大学の初期の史料も多くあった。その史料は二〇〇九年夏から秋にかけて学園史料室から大学史料室に移管した。このきっかけは次のようである。大学史料室の開設後、その存在を多少ではあるが知られるようになり、年々、問合せの件数が多くなった。南山大学関係の史料が、学園史料室と大学史料室に収蔵されていたため、双方で所在の確認をする必要があった。大学関係史料の問合せをする利用者は、大学史料室にあると察し大学史料室へ問合せる。両史料室で確認後、利用者に回答するが、時として両史料室にその史料が存在する場合がある。史料の持ち出しは、紛失回避のため行っていないので、利用者は両史料室を行き来しなくてはならないケースが何度かあった。これでは利用者・職員にとっても非効率であるとの事で、大学関係の史料は、大学史料室に集められた。これで、大学関係の史料は大学史料室で、大学以外の南山学園に関する史料は学園史料室で収蔵することとなった。

(三) 学園史料室と大学史料室の連携

二〇〇七年南山学園創立75周年記念として、学園全体で様々なセレモニー事業を企画し準備を進めていた。その一環として75周年記念誌の編纂事業があった。編集方針「一〇〇周年に向けて学園の将来を展望する」を掲げ、準備が進められていた。75周年記念誌を刊行する前の二〇〇五年に『南山学園史料集』の刊行が開始された。このシ

リーズの狙いは、75周年記念誌編纂および学園の一〇〇周年に向けて、史料の調査・収集・整理を行ない、史料の散逸を防ぎ、現時点でわかることを可能な限り明らかにして、共有していくことにある。⁽⁸⁾これが学園史料室と大学史料室の初めての連携事業であった。編集作業は大学史料室が行ない、刊行にともなう事務業務は、主に学園史料室が行なった。二〇一〇年三月『学園史料集5』を刊行する予定である。

『HOMINIS DIGNITATI 一九三二―二〇〇七 南山学園創立75周年記念誌』（二〇〇七年）の編集作業は、両史料室を軸に行なわれ、これまでで最大規模な編纂事業となった。編集方針「一〇〇周年に向けて学園の将来を展望する」を共有し続けるため、二〇〇三年四月に学園史料室の編集・発行による広報誌『75th Anniversary Nanzan Archives News』を創刊した。75周年記念誌の編纂事業の終了とともに、二〇〇八年三月の第九号をもって終刊した。

その後、「一〇〇周年に向けて」の継続的発展を維持するために、二〇〇八年四月、南山学園史料委員会が新設されて、（南山学園の）各学校が一つの組織として史料収集・保存・整理・公開する体制を整えられた。その連携を可視化するために、二〇〇八年一月一日に『南山アーカイブズニュース』を発刊し、編集は大学史料室が発行は学園史料室が行なうことになり、二〇〇九年一月二五日に第二号を発行した。

三 今後の課題

(一) データベースについて

大学史料室の設立当初は、南山学園全体の史資料管理データベースがあった。そこにデータを入力していたが、当ではまらない項目がある、データが大きすぎて動きが悪いなど、いろいろな問題が生じた。二〇〇九年、学園史

料委員会で、南山学園の各学校に見合ったデータベースを作成することが決定された。現在は大学史料室に見合ったデータベースができるまでの繋ぎとして、寄贈者・移管事務部署ごとにエクセルデータで入力した上で、紙媒体のファイルを作成している。ファイルは「寄贈日・移管日ごと」と、「寄贈者・移管事務部署ごと」の二パターンがある。二〇一〇年三月に南山大学史料室 Web ページを公開したので、今後、外部からの問合せが多くなると予想される。そのため、史料料の検索に必要な検索システムのデータベースの整備がいつそう求められるであろう。

(二) 個人情報保護について

大学史料室の目的として、史料料の収集・保管・公開がある。その上で、「個人情報の保護に関する法律」と「南山大学個人情報に関するガイドライン」に則し、閲覧・利用に際しては、特に注意を払って対応している。今後、学内手続きに則った上で、どのような要請が出てくるか、未知数である。

(三) 利用規程について

二〇〇八年十一月二五日の大学史料室運営委員会で、史料料の公開基準を設けることを前提として、南山大学史料室 Web ページ作成を進めることを承認した。公開基準は現在、作業中である。

おわりに

大学史料室の設立当初の所蔵史資料はとても貧しく、大学案内、学生便覧、大学広報誌などの、南山大学を知る際にまず参照されるような史資料でさえ、十分に揃っていないかった。学内者への移管・寄贈の呼びかけから約三年で、そのような史資料がほぼ揃った。今後は、学園創立一〇〇周年に向けて史資料の散逸を防ぎ、収集、整理していくことを、再度学内で共有し、その意識を継続するよう努め、所蔵史資料の充実を図っていきたいと思う。それには学園史料室との連携を大切に、より一層強めていくことが大きな鍵となるであろう。

註

- (1) 南山大学史料室運営委員会編『創刊に寄せて』『アルケイア』
第一号、二〇〇七年三月、南山大学史料室
- (2) 二〇〇四年一〇月一三日付 大学史料室検討プロジェクト
チームから副学長宛「南山大学大学史料室の業務・室員・運
営等についての答申」、大学史料室所蔵
- (3) 南山学園創立75周年記念誌編纂委員会編『HOMINIS
DIGNITATI 一九三二―二〇〇七南山学園創立75周年記念誌』
二〇〇七年、学校法人南山学園、五九〇頁
- (4) 京都大学文学部編『以文会友―京都大学文学部今昔』
二〇〇五年、京都大学学術出版会。初回は一九八六年。
- (5) 一九七五年三月二三日発行。『南山大学 BULLETIN』とは、
南山大学の広報誌のことである。
- (6) 全国大学史資料協議会編『日本のアーカイヴズ』二〇〇六
年、京都大学学術出版会。小池聖一『近代日本文書学研究所説』
二〇〇八年、現代史料出版。
- (7) 以下の叙述については、『HOMINIS DIGNITATI 一九三二―
二〇〇七南山学園創立75周年記念誌』を参照した。
- (8) 『HOMINIS DIGNITATI 一九三二―二〇〇七南山学園創立
75周年記念誌』六〇九頁。

The presence of Nanzan University Archives

KAWAI Yoko

Abstract

The Nanzan University Archives was set up on April 1, 2005. The new system of transferring and donating written record from each department or individual to the Archives was announced at the briefing for the educational and clerical faculty of Nanzan University, held in December, 2005, and practically started.

The annual publication of Nanzan University Archives is *Archeia:documents, information and history*, which was first published in March, 2007.

The Nanzan University Archives also cooperates with Nanzan School Corporation Archives on compiling historical documents and has published *Hominis Dignitati, 1932-2007:A Seventy-Five Year History of Nanzan School Corporation (2007)*, *Nanzan School Corporation Archives Collection(2005~)* and *Nanzan Archives News (2008~)*.

The lecture meetings and the symposiums were held once in 2005, twice in 2007, cooperating with the Nanzan University committee of program for librarian and school librarian teacher.

This paper refers to the feature of the Nanzan University Archives and its archival collection, and the cooperation with the Nanzan School Corporation Archives.